

100年の時を超えて

吉野郡十津川村は、奈良県の五分の一の面積を占め、96%が山林で、人口およそ4千人の奈良県南部の村です。この十津川村は、明治22年の大水害で被災し、当時、十津川村民の三分の一にあたる600戸2,691人が、家を失って北海道へ移住する事になりました。十津川水害で被災した人々が、北海道のトック原野に入植し、新十津川という新しいまちができました。

その移住のときに、神戸港から船で北海道へ渡ったわけですが、北海道へ向かう船を待つ際に、神戸の地元の方が、船を待つ十津川の人々に対して、とても手厚くお世話されたそうです。船出のときも、「北海道に渡って、がんばってこいよー」と何度も何度も励まされたそうです。

北海道へ渡った十津川の人々は、このとき神戸でいろいろとお世話になった話を子や孫の代まで言い伝え、語り継いでいました。年を経て、平成7年1月に起きた阪神・淡路大震災の折、「100余年前、明治22年の大水害のときに神戸の人々から受けた恩義に報いるのはこの時」と、北海道の新十津川から給水車が駆けつけたり、奈良の十津川にも北海道からこの話が伝えられ、奈良からも震災復興のために名産の十津川材が提供されるなど、様々な形で復興に尽力したそうです。

また、平成23年の紀伊半島豪雨で十津川村が被災した時には、神戸市や北海道新十津川町からも復旧・復興作業のために職員が派遣されたほか、多くの支援があったそうです。

これには、こんなエピソードもあります。阪神淡路大震災の被災地には、歌手のさだまさしさんが駆けつけて、被災した子どもたちのためのケアハウス「浜風の家」（兵庫県芦屋市）の建設のために東奔西走されていたそうです。さださんが支援していたこの時に十津川村の有志が、名産の十津川材を提供したことがきっかけで親交が始まり、それ以来、さだまさしさんは、十津川村が大好きになり、ことあるごとに十津川村を訪れ、たびたびコンサートも開いているそうです。平成21年からは村の観光大使も務めています。

また、さだまさしさんは、子どもたちに「自分の故郷への誇りと尊敬を心の中で育てられるように」と強く願って、新たに開校した十津川中学校の校歌を作詞・作曲しました。歌詞には「美しき空 美しき水」で始まり、「吊り橋高く」と谷瀬のつり橋など村の名所がちりばめられるとともに「助け支え合う仲間達と 千年の未来を創る」と力強く謳っています。

十津川、新十津川と神戸の人々は、100年以上の時を超えて、絆を忘れることなく助け合い、恩返しを果たしたのでした。感謝の気持ちや人と人とのつながりを大切に、みんなで助け合うことで、よりよい社会を築いていきましょう。